

## 球技学習における課題設定過程に関する実践的研究

—ラグビーフットボールにおける防御技術の指導を対象として—

廣瀬 勝 弘〔鹿児島大学教育学部(保健体育)〕・黒原 貴 仁〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕  
梶山 俊 仁〔中国管区警察学校〕

### A practical study of task-setting process in learning ball games

： Focusing on defence-technique teaching of rugby football

HIROSE Katsuhiko · KUROHARA Takahito · KAJIYAMA Toshihito

キーワード：球技学習, 課題設定過程, ラグビーフットボール, 防御技術

#### I はじめに

##### 1. 体育授業における球技学習の困難性

限られた時間の中で学びを展開しなければならない学校体育において、教師が球技<sup>注1)</sup>の学習を成功裡に導くことは困難を要する。一般に体育の教材づくりは、スポーツ・運動遊びである「素材」に、教師が「再構成」を行うことで、子どもが効果的に学習が展開できるような「教材」を提示する一連のプロセスであるといわれている(岩田, 1994)。球技の学習における「素材」とは、学習指導要領に示されるサッカーやバスケットボールに代表されるような既存のスポーツ種目である。しかし、既存のスポーツ種目は、背景としてその種目固有の文化を有する。そのために、既存のスポーツ種目を「再構成」するための視点は、曖昧にならざるを得ないというのが現実である。

また、一般に球技の学習は、「ゲームの学習」であるといわれる。しかし、そのゲームは、1つのボールを争奪することを契機とし、「チーム—グループ—個人」の各レベルにおいて、多様な課題が同時多発的に生じ展開される。そのために、球技学習において、教師が子どもに課題設定を明確に示し教材を構成することは、さらなる困難を極めることになる。

##### 2. 本論のねらい

このような球技学習の困難性に対し、本論では、当該ゲームのゲーム課題を明確に示す(ゲーム構造を明らかにする)ことを基点として、個人レベルの課題設定過程を示し、その授業実践を通

じて、問題点を抽出することをねらいとした。

ゲーム構造を明らかにし課題設定を行うことは、当該ゲームにおける課題は、「チーム—グループ—個人」という異なるレベルにおいても共通する課題となりうると考えたからである。なぜならば、球技の指導では、そのゲームに必要な個人レベルの技術指導を行う場合、鑄型化的指導が行われ、実際のゲームでは、全く使うことができない技術習得を目指し指導展開されている事例が散見されるからである。

本研究において、対象とした種目及び個人レベルの技術は、ラグビーフットボール(以下、ラグビーと表記する)の防御技術である。ラグビーのゲームは、ボール(1個)争奪を契機として、その争奪に勝利しボールを保持した側(攻撃側)が相手防御網の突破を試み、相手陣のゴールライン後方にボールを持ち運ぶ(正確には、「持ち運び」+「地面に接地させる」という2つの条件を同時に達成しなければならない)という特徴を有する。

学校体育において、ラグビーは、高等学校学習指導要領に取り上げられている種目である。しかし、ラグビーを専門とする教師が不在である学校では、授業で取り上げられないことが多くない。それは、ラグビーは、学校体育で扱われる種目の中では、防御時において身体接触が認められている唯一の種目であるため、危険が伴うと考えられていることが代表的な理由であろうと推察される。そこで、本研究では、この問題への回答を目指し、将来体育指導者となる教員養成学部

属する大学生（主としてラグビーを専門としない者）を対象として授業実践を行い、安全に自らの防御技術の習得を目指すことに考慮した。なぜならば、近い将来、指導場面において、学習者に新しい動きを発生させるための鍵となるものは、指導者自身の運動感覚そのものだからである（金子、2005）。

また、対象として取り上げた個人レベルの技術である防御技術（一般には「タックル」といわれる）の局面は、競技としてのラグビーにおいても事故の事例報告は少なくはなく、安全な防御技術の指導過程の構築は必要不可欠であると考え（日本ラグビー協会、2005）。さらに、古川らの報告（古川ら、2006）にある通り、競技レベルが低くなるほど、飛び込んで実施する危険な防御行動の発生傾向が高く、未熟練者にとって、安全な防御技術の習得は、事故予防や技術向上において欠かせないということは言うまでもないことである。

### 3. 研究の方法

上述した「本論のねらい」を踏まえ、以下の手順で、本論の展開を行うこととする。

- ①ラグビーのゲーム構造から捉えた防御技術の課題設定過程の策定。
- ②①で示した策定内容を基盤として、筆者による授業実践の実施。全授業後、受講者に質問紙調査を行い、課題設定過程の問題点抽出及び考察

を行った。授業期間及び調査対象者の詳細は、以下の通りである。なお、授業実践での学習過程及び全授業後の質問紙調査内容については、次章以降で詳述することとする。

#### 【授業期間及び調査対象者】

平成19年4月から7月末迄、前期授業期間に実施された鹿兒島大学教育学部保健体育専修開設科目「ラグビー」の受講学生19名（ラグビーを専門とする学生2名含む）。

授業時間は、1コマ90分間で、期間内に14回の授業を実施し、その中に防御技術の課題に関する学習過程を内包した（全体の学習過程については、表4及び表5を参照）。

## II 球技学習の課題設定過程

### 1. ラグビーのゲーム構造

ラグビーのゲーム構造を考えるにあたり、そもそもゲームとは何について争っているのかを考えたい。つまり、それは、競争目的を明確にすることであり、ゲーム構造を考えるための基点になると考えられるからである。

鈴木ら（2003）は、「競争目的の特徴」及び競い合いに用いられる「ボールの個数」という2つの視点を組み合わせることによって、ゲーム結果の未確定性ならびに競争課題が明確になり、3つのタイプ（「突破型」「的当て型」「進塁型」）に球技種目の分類を行った。

表1 競争目的からみた球技の分類論

カテゴリー名称	突破型	的当て型	進塁型	
種目の名称	サッカー、バスケットボール アメリカンフットボール、ラグビー、バレーボール、テニス	ゴルフ ボウリング	野球 ソフトボール	
競争の目的	ボールを目標地点(空間)に移動させること		本塁を陥れること	
ボールの個数	1個	プレーヤーの人数分	1個	
結果の未確定性の発生要因	ボールを保持しない防御側による妨害	ボール操作の困難性	1次ゲーム	ボールを保持しない防御側による妨害
			2次ゲーム	ボールを保持した防御側による進塁の阻止
競争課題	防御面の突破	ボールを的に接近させること	1次ゲーム	防御面の突破
			2次ゲーム	次塁に進塁すること

表1から、ラグビーは突破型に位置づき、他の該当種目としては、サッカー、バスケットボール、ハンドボール、アメリカンフットボール、テニス、バレーボールなどがあげられる。いずれも、「1個のボールを用いて」目標地点に運び込むと得点となるゲームである。得点の具体的な方法は、ボールを扱う側（攻撃側）が、物理的対象にボールを入れる、ラインで区画された空間にボールを持ち込む、ネットを隔てた相手方コートにボールを入れる等、様々であるが、攻撃側が防御をかいくぐってボールを移動させようとする点は共通していることになる。

デブラー・H（1993）は、球技の概念規定を「ボールゲームとは、明確な達成目標を持ち、途中経過がどうなるか定かでない（＝「結果の未確定性」）競技形式によって行われる運動遊技の一類型である」と述べている（括弧内は筆者による）。この概念規定にある「結果の未確定性」とは、攻撃側のボールを持ち運ぶ試みは、ボールを保持しない防御側によって妨害されるために、引き起こされることになる。ここで、妨害の主たる要因は、防御側の行為（インターセプト、レシーブ、タックル等）であると考えられる。これらは、常に「ボール移動を阻む防御壁」として機能する。本論では以下、便宜的にこれらを総称して「防御面」と呼ぶこととする。攻撃側にとって、

この防御面を突破することが得点を得るための不可欠な課題となる。この課題は、小学校低学年の子どもたち、また、Jリーグに所属するサッカー選手等、突破型種目を行う、全てのレベルのプレイヤーが直面する課題といえる。

つまり、突破型に位置づく種目に「結果の未確定性」を持たせる条件は、ゴールに向けてボールを進めることを阻む防御壁となる「防御面」の存在であると考えられる。突破型種目は、防御者あるいはネット等の物理的条件によって「壁＝面」が形成され、「ゴールに向けてボールを進めること」が必ずしも攻撃側の思惑どおりには展開されないようになっている。逆に、攻撃側にとっては、その面を突き破ることが競争課題となる。この「壁＝面」は、基本的に防御者の位置取りやボールの位置などにより決定づけられることとなる。

したがって、突破型種目がゲーム状況において有する「防御面」の構造は、表2に示す通り、概ね2つに分類することができる（廣瀬、2006）。それは、「ゴールの成否に重要な影響を及ぼす可能性のある防御面」（以後「最大防御面」と表記する）の位置取りに起因している。

突破型において、最も重要な競争課題は、最大防御面を挟んだ攻防であると考えられる。最大防御面に該当するものは、種目毎に固有に存在している。しかし、ゲーム自体は、この最大防御面で

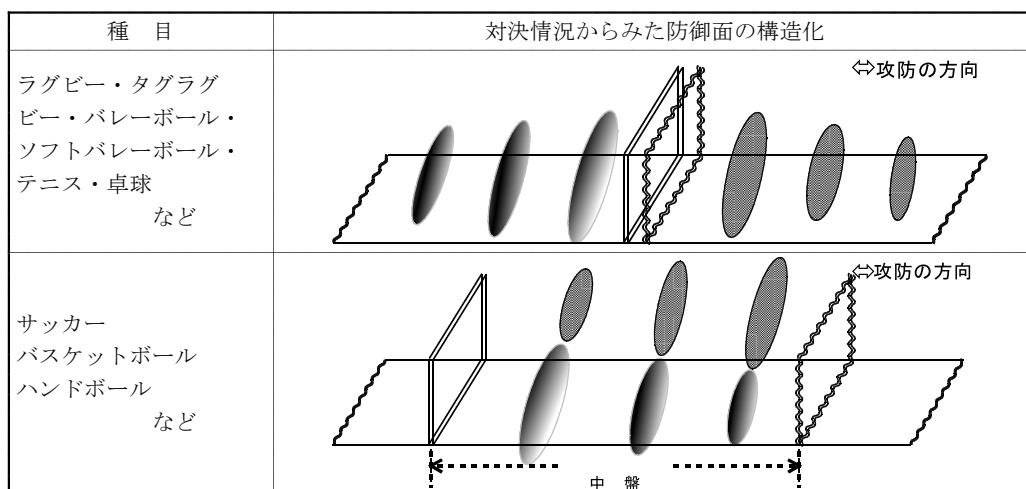
表2 防御面の層構造化

方 向	種 目	防御面の層構造化
最大防御面の後方	ラグビー・タグラグビー・バレーボール・ソフトバレーボール・テニス・卓球 など	
最大防御面の前方	サッカー バスケットボール ハンドボール など	

※2重の実線で囲まれた部分は、「最大防御面」を、楕円で囲まれた部分は、予備的・補佐的な「防御面」を表す。

また、楕円部分の大きさは、防御行動の比重を示す。太字波線は、ゴール・ゴールエリアを表す。

表3 対決状況からみた防御面の構造化



※2重の実線及び2重波線で囲まれた部分は、「最大防御面」を、楕円で囲まれた部分は、予備的・補佐的な「防御面」を表す。また、楕円部分の大きさは、防御行動の比重を示す。太字波線は、ゴール・ゴールエリアを表す。

の競り合いだけで成立しているわけではない。防御側は、最大防御面の前後で複数の予備的・補佐的な防御行動を行うことにより、容易に最大防御面を突破されないよう努力する。つまり、最大防御面に接近したところでのボール争奪では、防御側は、防御をするために多くの人数を必要とするなど、防御行動の比重は高まる。逆に、最大防御面から離れたところでのボール争奪では、防御側は、多くの人数を必要とせずに防御行動を行うことができ、結果として、防御行動の比重は低くなる(表2における楕円部分の大きさに該当)。

ラグビーは、攻撃側にとって、最大防御面、つまり、防御側にとって最も突破されたくない防御面が最初に位置づく種目であることが理解される。つまり、攻撃側にとって、ボールを保持した状況では、眼前の状況打破が、得点を得ることに直結することになると言ってよいだろう。防御側にとっては、眼前の攻撃側への防御行動が得点阻止に即座に結びつくことになる。言い換えるならば、ラグビーというゲームは、防御側にとって、最大防御面が最初に位置づくため、最初の防御の失敗を取り戻すことが困難であるゲームであるといえる。このように捉えると、同じ突破型種目であるサッカー、バスケットボール、ハンドボールなどとは、構造に違いが生じるため、当然なが

ら、その指導内容・方法にも違いが生じることとなることは、容易に理解されるであろう。

さらに、最大防御面の取り扱いの違いからゲーム構造を考えてみたい。表2で示した「防御面の層構造化」を、相手(チーム)と対峙した「対決状況」に照らし合わせ、改めて防御面の構造化を示したものが表3である。これにより、最大防御面の位置取りとそれに付随する防御面との関係性、各種目の競争目的に対する学習者の関わりを、改めて明確にみてとることが可能となるであろう。

## 2. ラグビーにおける防御技術の課題設定

表3に示す「対決状況からみた防御面の層構造化」から明らかになったゲーム構造を基点として、本項では、ラグビーの防御技術の課題設定について考えたい。

前項にて詳述の通り、ラグビーの防御を考える場合、防御側にとっての共通の課題は、「防御面の構築及びその維持」であるといえる。その課題は、チーム・グループ・個人の各レベルにおいて、ラグビーを学ぶものにとっては、共通するものであるといえる。そこで、個人レベルにおける、防御技術の指導過程を、その共通課題を基盤として、表4のように設定した。

表4 防御技術の指導過程

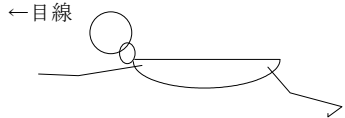
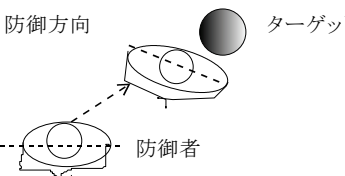
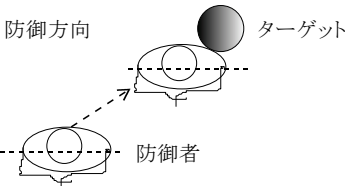
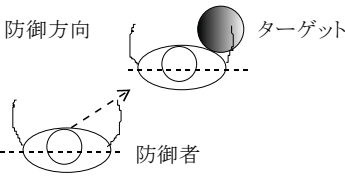
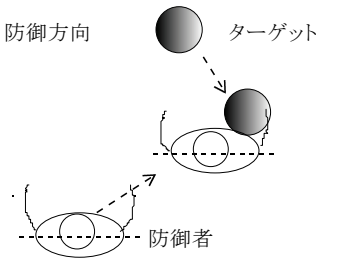
課題レベル	課題イメージ図	指導上の留意点
Step1 「ロッキング姿勢の定着」	[真横からのイメージ図] ←目線 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭を下げない(事故回避のため)</li> <li>・目線を上げる</li> <li>・背中を伸ばす</li> <li>・腰をしっかりと落とす</li> </ul>
Step2 「両腕を後ろで結び、肩及び胸を止まっているターゲットに対して実施」	[真上からのイメージ図] ↑防御方向 ターゲット 防御者 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロッキング姿勢の維持</li> <li>・目線を上げる</li> <li>・両腕を後ろで結ぶことで、しっかりとターゲットに自らの肩及び胸を接地させることを意識づける</li> </ul>
Step3 「ヒットする際の肩と同側の足を踏み込み実施」	[真上からのイメージ図] ↑防御方向 ターゲット 防御者 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロッキング姿勢の維持</li> <li>・目線を上げる</li> <li>・しっかりとターゲットに自らの肩及び胸を接地させる</li> <li>・ターゲットに接地させる肩と同側の足をしっかりと踏み込み、自らの肩のライン(波線部分)を揃えることで、防御面の維持を図る</li> </ul>
Step4 「両腕を下げ、手のひらを相手に向けながら実施し、ヒットしながら抱きかかえるように実施」	[真上からのイメージ図] ↑防御方向 ターゲット 防御者 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロッキング姿勢の維持</li> <li>・ターゲットの正面には位置取らない(必ず左右どちらかの肩を接地させることで、「逆ヘッド」の防御を未然に防ぐ)</li> <li>・手のひらを相手に向けることで、相手をしっかりと抱きかかえる</li> <li>・同側の肩と足をしっかりと相手に接地させる</li> </ul>
Step5 「動いているターゲットに対して実施」	[真上からのイメージ図] ↑防御方向 ターゲット 防御者 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロッキング姿勢の維持</li> <li>・ターゲットの正面には位置取らない</li> <li>・頭を下げない</li> <li>・同側の肩と足をしっかりと相手に接地させる</li> <li>・ターゲットを抱きかかえた後、自らの歩を防御方向に進める</li> </ul>

表4では、Step1～5まで5段階の課題設定を行った。これらは、前段階の課題を達成しなければ次課題の遂行が困難になるように系統性を考慮し、意図的に構成されている。球技学習の難しさは、相手に応じたり、応じさせる中で立ち現れる「運動の相互隠蔽性」に関する比重が高いためであるといわれている(廣瀬, 2006)。とりわけ、防御を行う際には、相手に積極的に応じることが求められる。したがって、本指導過程では、相手に応じるための防御者自身の身体操作に焦点化した。

Step1は、防御技術に不可欠な「ロッキング姿勢の定着」の課題である。ロッキング姿勢とは、ラグビーのゲームにおいて、スクラムなど多様な場面で必要な技術のひとつである。防御場面においても同様に、タックル時の事故原因の多くは、ロッキング姿勢の不備(頭を下げる・背中を曲げることから結果として頭の位置が下がる等)によるものが多い。防御技術の基本としてロッキング技術の定着は、ラグビーを学習する全ての学習者が達成しなければいけない個人技術であるといえる。

Step2は、止まっているターゲット(攻撃側)に対して、防御者が自らの両腕を後ろで結び、肩及び胸を接地させることで防御行動を行う課題である。この課題においても、ロッキング姿勢の維持が大切な指導上の留意点となる。また、自らの腕を後ろで結ぶことから、ターゲットに強くヒットするためには、自らの腰の位置取りを低くしなければ達成できないと考えられる。

Step3は、ターゲットにヒットする際、自らの肩と同側の足を踏み込み実施する課題である。Step2以上に強くターゲットにヒットするためには、相手に接地させる肩と同側の足をしっかりと踏み込むことが求められる。また、防御面の構築及び維持を図るためには、自らの肩のライン(表4における波線部分)をそろえることで、防御側が達成するべきラグビーのゲーム構造(最大防御面を突破させない)の達成が自ずと目指されることとなる。ここでは、個人の課題がチームとしての課題として、明確に学習者に位置づけられるよう留意する必要がある。

Step4は、後ろで結んでいた手を外し、下ろした手のひらをターゲットに向けながら、防御行動の実施を行う課題である。これは、ターゲットを抱きかかえることから、掴まえる、さらには、タックル(掴まえ+倒す)へと繋がる課題であるといえる。この課題で重要なことは、前課題までも同様であるが、防御行動の際、ターゲットの正面に位置取らないということである。防御を行う際、防御側は自らの左右いずれかの肩及び胸を相手に必ず接地させることからタックルを行うことになる。例えば、表4中にあるように、自らの右肩をターゲットに接地させる場合は、必ず自らの右耳部分の頭部が相手に接地することになる。つまり、ターゲットに接地させる肩と頭部部分が同側である防御というのが、安全な方法であるといえる。しかし、ゲーム中では、相手の正面に立った場合等に多く現れるのが、肩と頭部が同側にならない防御(「逆ヘッド」防御)である。この防御は、特に首部分に通常以上の負荷がかかるため、重大な事故を引き起こす場合が多い。「逆ヘッド」防御を未然に防ぐために、指導当初から、ターゲットの正面に立たせず、相手に接地させる部分は、同側の「耳-肩-足」ということを徹底させることが重要であるといえよう。

Step5は、動いているターゲットに対して実施するため、相手に応じながらの防御行動を求められる課題であるといえる。実際のゲーム局面では、この課題レベルの達成が求められることは容易に理解される。この課題の達成には、Step1～4までの課題内容の全ての達成が必要であることは言うまでもない。

### Ⅲ ラグビーにおける防御技術の指導実践

本章では、前章において設定した防御技術の指導過程について、筆者による授業実践ならびに受講者による質問紙調査を実施し、その実践上の問題点を抽出することを目指した。

#### 1. 筆者による授業実践の内容

授業における学習過程の概要は、表5の通りであった。学習内容を4つのテーマ(「ボールに慣れる」「突破をする」「グラウンドをワイドに使う」「7人制によるゲーム」)に分け、学習過程を

表5 「ラグビー(筆者による授業)」の学習過程の概要

時間	学習目標及び課題	学習内容及び具体的課題	防御技術の指導内容
1 2	「ボールに慣れる」	・ボールタッチ ・パスリレー ・盗人ゲーム ・コーナーゲーム ・タグ取りゲーム など	
3 4 5 6	「突破をする」 「防御面に接近する」	・関所ゲーム ・タグラグビー ・ストレートラン ・ハンドダミーへのヒット ・ランニングパス(ループパスなど) ・3人vs2人による抜き合い など	Step1 「ロッキング姿勢の定着」
7 8 9	「グラウンドをワイドに使う」 「防御技術の習得」	・1人vs1人から3人vs3人までのスクラム ・順目に連続攻撃(2回) ・タッチラグビー(タッチ5回まで) ・ハンドダミーにヒット など	Step2 「両腕を後ろで結び、肩及び胸を止まっているターゲットに対して実施」  Step3 「ヒットする際の肩と同側の足を踏み込み実施」
10 11 12 13 14	「ビデオ視聴による動き方の確認」 「防御技術の習得」 「7人制によるゲーム」 「まとめのゲーム」	・3人vs3人によるスクラム ・ラインアウトのスロー&キャッチ ・チームを固定し練習実施 ・防御はホールドにてゲーム実施 ・まとめのゲーム： 防御はホールドのみ モール形成後3名まで参加有り キック使用有り	Step4 「両腕を下げ、手のひらを相手に向けながら実施し、ヒットしながら抱きかかえるように実施」  Step5 「動いているターゲットに対して実施」

設定し授業実践を行った。

学習目標として「突破をする」「防御面に接近する」という内容を、学習の前半部分に設定することで、防御面を形成・構築及び維持することの意義を、学習者に理解させることに留意した。また、それらの各目標は、攻撃側にとっての課題であるといえる。攻撃側の課題解決を基に授業展開を行うことで、学習者である受講学生らに防御側の課題設定がより明確になるであろうと筆者は考えた。したがって、防御技術の指導は、攻撃側の課題内容を習得した後、つまり、学習の中頃から位置づけることとした。

## 2. 受講学生への防御技術に関する質問紙調査

全授業終了後に、受講学生に防御技術に関する質問紙調査を実施した。質問紙調査の目的は、筆

者の設定した防御技術の指導過程の修正点ならびに問題点などを探ることである。質問紙の内容は、金谷(2003)の質問紙を参考に3項目の質問を設定した。記載については、図示を含めた自由記述で行った。質問内容及び質問意図の詳細は、以下の通りである。

・質問1:「現時点での自分なりのコツ」

質問意図…现阶段での自らの問題点を明らかにする。

・質問2:「これまでの指導段階における課題の中で、自分でポイントになった課題について」

質問意図…防御技術課題の達成に有用な段階を明らかにする。

・質問3:「自分のコツ(技術ポイント)をつか

むきっかけになった指導者や仲間の働きかけについて]

質問意図…防御技術の課題達成に有用な技術内容を明らかにする。

この3つの質問内容から、筆者による課題設定の基盤となった「ゲーム構造の理解」が、受講学生の中に、どのようなかたちで形成されているのか、ということを具体的に探ることができるのではないかと考えた。また、受講学生の19名中、半数の学生が本授業においてラグビーボールに初めて触れる学生であった。したがって、防御技術においても、全く初めて実施することが予想された。運動感覚の意識体験について、稚拙な言語表現でも構わないので受講学生に記載をさせることは、指導内容の構築ならびに検討には、有用であると考えた。質問紙の考察は、回収された調査用紙16名中、ラグビー部学生2名を除外した14名を対象として行った。

まず、対象学生14名を防御技術の習熟度別に3グループに分け、各グループ毎に記述内容を比較した(表6～8)。

習熟度別のグループ分けは、筆者が調査時点における受講学生の状況を観察・判定するという方法で行った。グループ分けの目安は、「動いているターゲットに対して実施できる者(Step5)：5名」「両腕でターゲットをヒットして抱きかかえることができる者(Step3及び4)：4名」「自らの肩のラインで防御面の構築が困難である者(Step1及び2)：5名」である。

習熟度の違いによる記述内容の変容については、「動いているターゲットに対して実施できる者」グループの記述内容(表6)が、防御課題を明確に捉えていることがみとれる。「質問1」での回答にあるように、自らの現在の課題ならびにその解決手段について、他のスポーツ種目との動きの類縁性を踏まえながら記述している(下線部分)。特に、「質問2」と「質問3」の関連について、つまり、結果として防御技術の指導段階と内容についての意味を整合させており(「胸を合わせていく感じ」「下から上に」「足をふみこむ」など)、自らの体を通じて動きの変容を精確に記述

していた(下線部分)。一方、自らの肩のラインで防御面の構築が困難である者」グループの記述内容(表8)では、「課題2」と「課題3」の関連性は全く見ることができない。「質問1」にある、自らの課題の把握については、概ね理解できているが、その課題をどのような方法や内容で解決すればよいのか、という具体的な解決手段については見出せないようだ。

また、防御面の構築及び維持についての理解は、「動いているターゲットに対して実施できる者」グループ、「両腕でターゲットをヒットして抱きかかえることができる者」グループ(表7)らの記述内容にある、「スクラムの基本姿勢からのタックル」「体を起こす」「腰を落とす」などから、防御面の「構築」に関しての意識は高いが、それを「維持する」ことの記述は見られなかった(下線部分)。また、「手を使わずに(胸を)合わせていく」という課題設定を提示することで、上体を起こすことへの理解へ繋がっているという記述が見られた。このことは、今後、さらに指導過程を修正する際の重要な示唆であると考えられる。なぜならば、この上体を起こすということは、結果として頭を上げることに繋がり、事故防止に欠かせない指導内容となるからである。危険な局面においては、そのリスク要因を取り除く課題設定がさらに求められることになる。



表6 「動いているターゲットに対して実施できる者」の記述内容

	質問 1	質問 2	質問 3
S.T	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手にスピードにのせない</li> <li>タックルの姿勢を身につけること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li><u>相手の胸に合わせにいく</u>～手を使わずに合わせにいくなどの段階練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li><u>胸を合わせにいく感じ</u></li> </ul>
Y.S	<ul style="list-style-type: none"> <li>当たる瞬間にしっかりと足を踏み込む</li> <li>当たる瞬間にしっかりと腰を落とす</li> <li>当たる瞬間に腰と足をほぼ同時にいれる</li> <li>相手の動きをよく見る</li> <li>相手をホールドする瞬間スピードを上げる</li> <li>ホールドする瞬間は、胸をはり、下から上に突き上げるような感覚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初の段階で胸をしっかりと張った正しい姿勢で歩くこと</li> <li>くりかえしホールドの練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ホールドの瞬間にしっかりと腰を入れる</li> <li>こわがらずに胸をはって、おもいきり当たる</li> <li><u>当たる瞬間は、低い姿勢から上に突き上げるようにする</u></li> <li>目標となる相手をよく見て、当たる瞬間を速くする</li> <li>遠慮したらダメ</li> <li>足をしっかりと踏み込む</li> </ul>
H.S	<ul style="list-style-type: none"> <li><u>しっかりと足を踏み込む</u></li> <li>同じスピードでタックルをするのではなく、いきなりスピードを上げたり、急に方向転換したりしてタックルする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手を使わないで胸で当たっていく練習により、上体を起こした状態で胸を当てられるようになった</li> <li>相手がゆっくり左右に動き、それに対応してタックルすることにより、正しい頭と足の位置を確認できた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>逆ヘッドを気をつけるように言われ、注意して練習していくうちに、相手がどちらかに逃げても、逆ヘッドさえ気をつければ、踏み込む足がどちらか自然に分かり身に付いてきた</li> </ul>
I・T	<ul style="list-style-type: none"> <li><u>あたるときに強く足をふみこむ</u></li> <li>あたった時に顔をおこす →下を向かない</li> <li><u>下から上に押し上げるようにしてあたる</u></li> <li>スクラムを組む時の姿勢を基本とする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>動きの中でのホールド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ラグビー部員からのアドバイス</li> </ul>
Y.K	<ul style="list-style-type: none"> <li>足をしっかりとふみこむ</li> <li>胸を張る</li> <li><u>バレーのレシーブの構えに似ている。後転倒立の腰の使い方にも似ている</u></li> <li>下から斜め上にあたる</li> <li>相手の腹あたりにあたる感じ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>止まっているハンドダミーへのホールド練習</li> <li>動くハンドダミーへは、どちらの足を出してホールドするかが、ポイントになった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li><u>「下から上に」「足をふみこむ」</u></li> <li>ラグビー部員の見本</li> </ul>

表7 「両腕でターゲットをヒットして抱きかかえることができる者」の記述内容

	質問 1	質問 2	質問 3
N.T	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>イメージとしては、下から上に突きあげるというイメージ</u>でやっているがゲームになるとなかなかできない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スクラムの基本姿勢からのタックル</li> <li>・ 背筋を伸ばして腰を突き出す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先生やラグビー部員からのアドバイス</li> </ul>
A.T	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 低い姿勢からぶつがる</li> <li>・ 足の位置が大切</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先生やラグビー部員からのアドバイス</li> </ul>
U.T	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体をしっかりと起こして、腰も一緒にあたりにいくようにする</li> <li>・ 最後に一步足を踏み込むようにする</li> <li>・ <u>下から上に押し上げるようにする</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体を起こすというのは、バレーボールのレシーブの構えと同じだったただで、それが分かったときは、体全体であたることできるようになった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ あたる瞬間に「足を一步踏み込むように」と言われたとき</li> <li>・ 「肩であたりにいくのではなく、腰であたりにいく」と言われたとき</li> </ul>
Y.K	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ できるだけ手を大きく広げる</li> <li>・ 瞬間的にスピードを上げ強くあたる</li> <li>・ <u>低い姿勢で背筋はまっすぐ</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ サッカーのショルダーチャージの癖が取れずに、しっかりとあたれなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 胸を張ること</li> <li>・ 手を大きく広げること</li> <li>・ 足をしっかりと踏み込むこと</li> </ul>

表8 「自らの肩のラインで防御面の構築が困難である者」の記述内容

	質問 1	質問 2	質問 3
M.T	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>少し下からつきあがるようにしてあたりにいく</u></li> <li>・ ふみこむ足を意識</li> <li>・ しっかりと手を固定しに行く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 足のふみこみ</li> </ul>	
S.S	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ おもいきりつつこむ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 恐怖心の克服</li> </ul>	
M.K	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 踏み込みを力強く素早く行う</li> <li>・ 重心を低くして相手の下側から上へ持ち上げるようにつかまえる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ハンドダミーへのあたり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友人からのアドバイス</li> </ul>
S.K	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ホールドの時は、下から上へ突きあげるようにしてあたる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 動く相手へのホールドやタックルが難しかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「片方から追い込む」というアドバイス</li> <li>・ 「胸を張って面であたる」というアドバイス</li> </ul>
I.S	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>自分のイメージとしては、下からつきあげるといような感じ</u></li> <li>・ あたるときは胸をはって</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体勢を低くしてはいる</li> <li>・ 強くはいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最初、強くあたる時、痛かったが顔を上げ胸をはるように指示されてからはあたりやすくなった。</li> </ul>

#### IV まとめ

本研究では、ラグビーの防御技術を対象として、そのゲーム構造を明らかにすることを基点として、個人レベルの課題設定過程を示し、筆者による授業実践を通じて、その問題点を抽出することをねらいとした。以下、まとめとしたい。

ラグビーのゲーム構造の把握を基盤として、個人レベルの防御技術の指導過程を提示したのが表4である。防御側にとっての共通課題である「防御面の構築及び維持」から、Step1～5までの課題抽出ならびに設定を行った。また、筆者による上記指導過程の授業実践を通じて、受講学生らが、ゲーム構造の理解を通じ、個人レベルの技術内容の課題把握が概ね可能であることが確認された。特に、「動いているターゲットに対して実施できる者」グループの記述内容については、指導段階の問題点とその解決手段について詳細に記載している事例が多く見られた。指導過程のStep2及び3における、自らの腕を後ろで結ぶことから、胸を当てることの意識ならびに上体を起こすことに留意していることが理解された。しかしながら、個人レベルでの課題設定過程に焦点化し質問紙調査を行ったたにも関わらず、実際のゲームの中での動きの質と練習課題での動きの質というのを、受講学生自身が混乱して記述していた事例も散見された。ゲーム把握のための質問方法については、今後の検討課題であると考えられる。

今回は、個人レベルにおける防御技術の課題設定過程の検討を行った。本研究を契機として、さらに、グループレベルでの防御技術の課題設定過程についても、ゲーム構造を基盤として考えることができよう。これらについては、今後の筆者の課題としたい。

#### 注

1) 本論では、小学校低・中学年の「ゲーム」領域、高学年の「ボール運動」領域、中学校・高等学校の「球技」領域を総称して、「球技」と表記することとする。

#### 引用文献

- デブラー、H他（1993） 唐木國彦監訳 「ボールゲーム指導事典」 大修館書店 pp. 1-12
- 古川拓生・竹村雅裕・中川昭（2006） 「ラグビー競技におけるタックルプレーの様相について」 筑波大学体育科学系紀要 第29号 pp. 71-75
- 廣瀬勝弘（2006） 「ゲーム構造からみた球技の学習内容」 伝承 第6号 pp. 57-67 運動伝承研究会
- 岩田靖（1994） 「教材づくりの意義と方法」 高橋健夫編著『体育授業を創る』 大修館書店 pp. 26-34
- 金谷麻理子（2003） 「『コツ』の言語表記とその問題性について」 スポーツ運動学研究 第16巻 pp. 27-35 日本スポーツ運動学会
- 金子明友（2005） 「身体知の形成(上)」 明和出版
- 日本ラグビーフットボール協会編（2005） 「ラグビー外傷・障害ハンドブック」
- 鈴木理・土田了輔・廣瀬勝弘・鈴木直樹（2003） 「ゲーム構造からみた球技分類試案」 体育・スポーツ哲学研究 第25巻第2号 pp. 7-23 日本体育・スポーツ哲学学会